

左官の仕上げを見直す

素材の持ち味や量感、自由な表現が住まいを豊かなものにしてくれる左官仕上げ。現代の建築材料、工法などに呼応し、左官の世界でも新しい素材の登場や、伝統的な素材を今にいかす左官職人の動きがみられます。真に快適な日本の住まいを考える時、家づくりという行為を見直す時、左官の世界はひとつの手がかりを与えてくれるかもしれません。

材料を知る

様々な仕上げ材料。原料は？特徴は？

○土

日本の昔からの塗り壁と言えば土壁。基本的な材料は、土、砂、藁、スサ、糊、水。これらを泥状によく練ったり、こねたりしたものが材料となる。土に含まれている粘土は水を含むと粘りが出て固まり、乾燥しても形を保つという特殊な性質がありこれを生かして土壁は作られてきた。しかし現在では自然の土そのものが使われることは稀になり、目に触れる機会も少なくなってきた。

塗り方によってラフなものから光沢のあるもの、洗練された仕上げまで豊かなバリエーションをもつ素材である。

○漆喰

古くから使われてきた内外壁の仕上げ材料のひとつ「漆喰」。漆喰は粉状の消石灰に糊、麻スサや紙スサを混ぜ、水で練ったもの。下塗り用の漆喰には砂も加わる。主原料の消石灰のことを普通「せっかい」と呼んでいるが、これは石灰石を焼き（生石灰）、これに水分を与え反応させてつくられる。漆喰を水練りして塗ると、空気中の二酸化炭素と反応し、消石灰が石灰石の成分に戻っていくことで徐々に硬化していく。このため緻密で堅く、耐水性が高いと

いう特徴をもつ。

漆喰には吸放湿機能があり、塗り厚がある程その機能は高まるが、塗り厚が薄い場合でも塗り面積があれば、その効果があらわれるようだ。



柿渋を塗った木組みと漆喰の白壁がコントラストを成す趣のある空間。(砵の家)

従来は左官職人が海藻を煮て糊液をつくり（ふのり）、これに麻スサを混ぜ、消石灰や砂と合わせて現場で漆喰をつくっていた。現在はこれらの素材に塗りつけやすいように可塑性などを加えた粉体の既調合材を水練りして使うのが一般的。糊液で練状にしたものもある。粉末化学糊を使用している製品もあるが、天然の海藻糊を使用し、すべて自然素材からなる既調合漆喰材料も出ている。

漆喰壁というと、左官職人の技量、労力が最も必要と言われるなめらかな表面の「磨き仕上げ」、土蔵の壁などに行われる「押さえ仕上げ」を思い浮かべるが、現在は顔料や小石、藁などの配合や塗り方で、色やテクスチャーに変化を与える仕上げも用いられている。

□漆喰仕上げパターンの一例



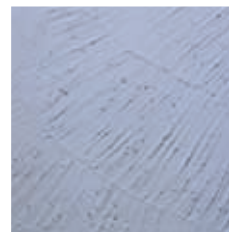
漆喰わら入り仕上げ



漆喰カット柄仕上げ

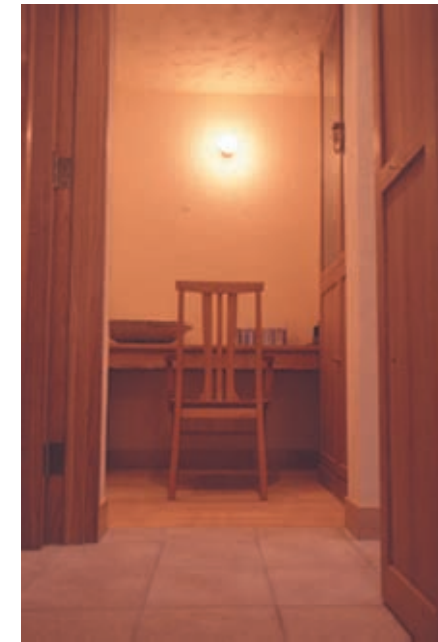


漆喰ウェーブ仕上げ



漆喰黒寒水仕上げ

数10種類のパターンが可能(写真提供:近畿壁材工業
<http://homepage2.nifty.com/kinkikabezai/>)



壁と天井で漆喰の仕上げパターンを変えた例。照明による陰影が美しく映える。(尾山台の家)

○石こう

石こうは西洋建築の白い壁に使われる原料のひとつで、日本でも明治時代に洋館などで塗られるようになった。石こうの成分は硫酸カルシウム。天然石こうを焼いた焼せっこうや肥料工場や化学工場からの副産物としても得られる。

水を加えることで固まり、収縮はほとんどない。ちなみに乾燥後は水を吸うと強度が落ちるので、外壁などには使えない。

また石こうは内装下地に使われる石こうボードの原料としても使われる。



漆喰の白は憧れの色だった

奈良時代には既に小舞を下地に下塗り、中塗りをを行い、白土や消石灰で上塗りを行うという技法が完成、後の時代も城郭建築の隆盛によりさらに発展していったという左官技術。地域差はあるものの、漆喰に使われる石灰や色土は一般には稀少だったため、庶民の家、なかでも都市以外の場合

は近年まで荒壁のままや中塗り仕舞いも多かったようで、一般庶民にとっては明るく白い壁は憧れだったことでしょう。今でも漆喰と聞くと「高そう…」とってしまうのは、ご先祖様からのDNA情報によるものなのでしょうか…。



○珪藻土

健康素材としてよく耳にする「珪藻土」。珪藻土は海や湖などに生息していたプランクトンの死骸が堆積してできた土層から採取される。北海道から九州まで分布し、埋蔵量も豊富。珪藻土の特徴は多孔質であるということから、吸放湿作用が望める。

忘れてはいけないのが珪藻土は粘り気がないため、左官材料にするには固結材が必要ということ。現場での調合は可能だが、現在は固結材を入れた既調合素材として製品化されているものを使うのが主流。固結材に使われるのは粘土、消石灰、セメントや石



珪藻土の電子顕微鏡写真
(吉野石膏 技術レポートより)

こう、合成樹脂など。樹脂系接着剤を配合した製品では珪藻土本来の性能をを阻害しないか、接着剤自体が安全なものであるか確認したいもの。珪藻土建材に配合されている珪藻土自体も数%から数10%のものまで様ざま。

身近に使われている左官材料の原料

左官材料の原料は建材としてだけでなく身近なところでも昔から使われてきたようです。珪藻土は成形、焼成して七輪やコンロに、精製して酒やビール、みりん、食用油の濾過材などにも使われてきました。石こうは豆腐を固めるにがりの役目をする「すまし粉」ほか、固まっても収縮しない性質を利用して金型などを作る枠材、歯型やギブスなどを作るのに使われています。



珪藻土壁と杉の腰板貼りで仕上げたリビング。腰板は汚れ易い足元まわりを保護することにも有効。(朝霞の家)



PAC住宅で使用している左官材料①

タイガーケンコート[吉野石膏株]

タイガーケンコートは焼き石こうを原料とした石こう系塗壁材(石こうプaster)に珪藻土を配合したものです。そのため他の石こう系の塗壁材同様、施工後の寸法変化がないことから、ひび割れが生じにくく、また強度や耐久性に優れています。「石こうにも十分、調湿機能があるのに、珪藻土を入れるとは邪道だ。」と言われたことも以前ありましたが、珪藻土を加えることで、さらに吸放湿性能を高めたものになっています。また、タイガーケンコートにはホルムアルデヒドを吸収し、分解する性能があり、アセトアルデヒドに対する低減性能も併せ持っています。

模様や色のバリエーションもある製品です。

私どもはもともと石こうボードメーカーなのでここで少し石こうボードの話。石こうボードには原料の石こうが芯となりその両面に紙がついています。「この紙は接着剤で付けているのですか？」と聞かれることがありますが、石こうの針状の結晶構造が紙の繊維としっかりかみ合うため、接着



ケンコート塗りの壁(東林間の家)



ケンコート塗りの壁(東林間の家)

剤なしで紙がついているのです。同じ理由で石こうボード下地にケンコートを塗る場合、接着増強のために使われるシーラー等は必要ありません。

自社の石こうボード「タイガースカットボード」では通常石こうボードの約3倍の吸放湿性能を有しています。これもPAC住宅で使って頂いています。

(取材:株吉野石膏DDセンター需要開発部

島崎 裕士さん)

○既調合素材



本聚楽壁の茶室(日高の家)

あらかじめ必要な材料が配合されたメーカー製の既調合素材。現場では指定量の水を加え、ミキサーで練るだけで使えるようになる。現在では素材、用途、仕上げ方別に多種多様なものが出ている。通常「聚楽壁」というときも既調合の和風の土壁風のものを指す。

原料はそれぞれの材料で異なるが、土、木粉、砂、大理石粉、パーライト、バーミキュライト、合成樹脂エマルジョン、メチルセルロース、着色材、減水材、混和材など。

これらの利点は均質化され、性能が安定していること、目的に応じた性能が得られること。他の材料を混ぜて使うことができないものもあるが、半製品として出荷、地場の材料を加えて使うものも出てきている。

先に述べたように漆喰、珪藻土も既調合素材のものがある。

PAC住宅で使用している左官材料②

さつまなかぎりしまかべ 薩摩中霧島壁[株高千穂]

薩摩中霧島壁の主原料は火山灰です。2000~3000℃という高温で焼かれている火山灰は多孔質という特徴を持っています。同じ多孔質ということで珪藻土と比較されますが、珪藻土はもともと有機質に対し、火山灰は無機質であるという点が違うと言えます。火山灰も珪藻土同様、それ自体には粘性がないため、固結材を必要とします。薩摩中霧島壁は固結材に海藻糊(つのみた)、石こうを用い、原料にすべて自然素材を使用しています。色や仕上げパターンも様々なものがあります。

調湿、脱臭、殺菌等の効果があり、今話題のマイナスイオンを発生するという特徴もあります。

施工については下地が石こうボードの場合は材料がしっかり付くのでシーラー等を使う必要はありません。

コストはクロスと比べまだまだ高いため、コストへの取り組みも必要だと考えています。(取材:株高千穂ライフニックス部門 営業販売課 内田 博さん)



中霧島壁で仕上げたタタミの間。据には塗壁の保護と意匠から和紙を貼った。(高尾の家)

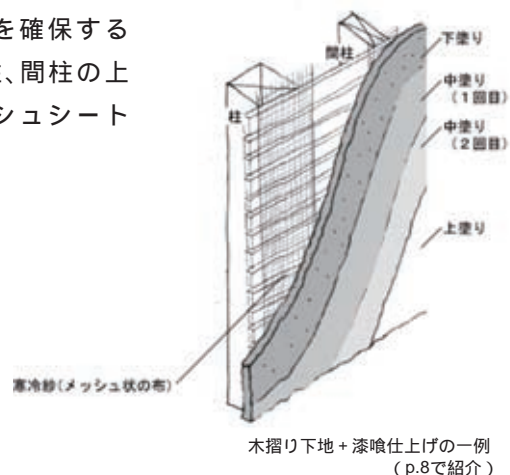
コストは...?

左官仕上げは材料だけでなく塗り厚、仕上げ方によってもコストが変わってきます。

漆喰、ケンコート、中霧島壁について、クロス仕上げとコストについて比べると、材料費と施工費、諸経費などを含めた価格で2~3倍程度高くなるようです(石こうボード下地の場合)。ただし、漆喰の磨き仕上げなど、手間や技量が必要なものはさらに高くなると言えます。

(p.11にもコストについての話があります。)

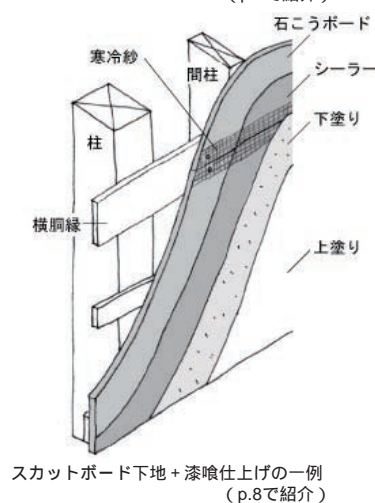
の通気を確保するため、柱、間柱の上にメッシュシートを貼る。



石こうボード下地

現在の住宅で一般的に使われているもの。(PAC住宅では(株)吉野石膏のタイガースカットボードを使用。)

仕上げ材料によって直接材料を塗って良いもの、仕上げとは別の材料で下塗りを行うものがある。



シーラー、プライマーも安全を確かめて

塗り壁の施工では、作業をしやすくする、仕上がりを良くするなどの目的で下地の処理にシーラーやプライマーといったものが使われることがあります。先に紹介した「ケンコート」や「薩摩中霧島壁」においても、下地の種類によってはシーラーが必要なものと。シーラー、プライマーには、化学物質が含まれているものもあるため、使用する前に成分をメーカーに問い合わせる、身体に合うかどうかを確認することは必ず行っておきたいものです。

【参考文献】

CONFORT[コンフォルト]2003年4月号(株)建築資料研究社)
CONFORT[コンフォルト]6月別冊 土と左官の本(株)建築資料研究社)
建築知識 2003年2月号(株)エクスナレッジ)
エクスナレッジムック 左官[超実用]テクニック読本
(株)エクスナレッジ)

(写真の住宅はすべてエアサイクル産業にて設計・施工した実例です)

PACと左官仕上げ

PAC工法は左官仕上げをより活かす

日本省エネルギー住宅協会 理事長 田中 慶明

外と室内、両側の空気に触れていた伝統的な土壁

伝統的な小舞下地による真壁は、その両面が空気に触れていた。そのことが土壁の特性を生かすポイントであった。土壁の温熱環境に関する機能は調湿と蓄熱であり、厚さ10cmを越える土壁が室内と外に面していることでそれぞれの機能がプラスに働いていた。単純に言ってみれば、建物内の湿気が多くなれば吸湿し、少なくなれば放湿することで室内の湿気を安定的レベルに保とうとし、同時に夏は夜間の涼しさを蓄え、昼間は建物内の温度が外気温になっても壁そのものの温度は低く保たれ、輻射による効果と風通しで中にいる人間にさわやかさを与えていた。ただし、冬の寒さには対処できなかったことは周知のとおりである。

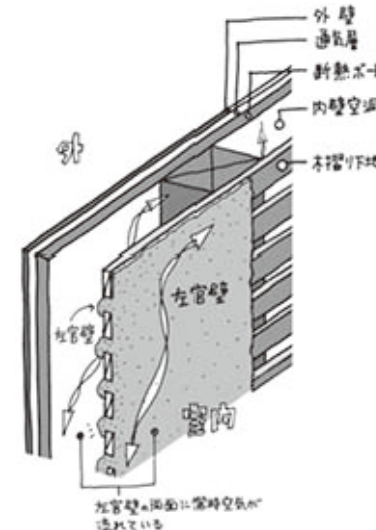
室内の壁の裏側にも空気が流れるPAC工法

PAC工法は、冬の寒さに対処しつつ伝統的土壁のもつプラスの面、すなわち調湿と蓄熱を建築的手法で回復しようとしたものである。これも単純化して言えば、冬は昼間の太陽熱などを蓄熱し夜間にそなえ、室内の乾燥しすぎを調湿機能で防止。夏は夜間の涼しさを蓄熱し昼間にそなえ、室内の湿気を吸収しながらも床や壁面をさらっとさわやかな感じに保つ働きをしている。

もちろん、こうした機能は、間取りや工法、使用する材料などの建築的手法そして開口部の日射遮蔽や開け閉め、住まい方など複合的要素のバランスがとれたときに十分発揮されるものであるが、そうした中でも、左官による塗り壁の効果は大きいものである。

PAC工法のよさは、現代の左官壁においてもその両面に空気が流れることにある。室内に面することは当然であるが、左官壁の裏面にも常時空気が流れているのである。裏側は内壁空洞と呼ばれ、外張

りされた断熱ボードと左官壁の間である。柱の太さや大壁・真壁などにもよるが10cm内外の厚みのある空洞であり、夏冬かわらずに空気の流れを確保している。もちろん、その流れ方は夏冬で切り替わる。

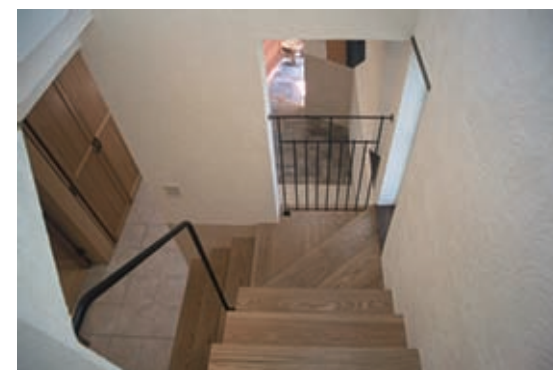


塗り厚、真壁・大壁で異なる下地の種類

現在PAC工法で実施している左官壁は2種類あり、一つはスカットボードと呼ばれる杉板と同程度の調湿性能のある石こうボードに薄塗りするタイプと文明開化以降の伝統である木摺りを使った厚塗りのタイプである。ボードに塗るタイプは大壁も真壁もできるが、木摺りタイプは大壁表現に限定される。厚塗りで真壁表現にしようと思えば古来からの伝統である小舞下地による塗り壁で実現が可能である。小舞は木摺りよりもさらに厚塗りが必要となる。

材料面からみた調湿と蓄熱の機能は、ボードタイプ、木摺りタイプ、小舞タイプと向上する。コストは単純比較はできないが、仕上げの方法が同一であるとすれば、当然厚塗りほどかかるのは常識であろう。

もちろん機能性ばかりではなく、本物のもつ質感が住まい手に与える満足感や落ち着きはまた格別のものがあり、心理的效果も抜群である。



素手でパターンをつけた漆喰壁。木やタイル、アイアンといった素材とも自然に調和する。(尾山台の家)

左官に出会う

総合建築 植田

植田 俊彦さん

「左官」とは壁(土壁、漆喰ほか)を塗る職人のこと。兵庫県の淡路島で長年活躍されている植田さん。新しい左官の世界をリードする久住章さんと若い頃、共に修行されたいわば久住さんの一番弟子。これまでなかった漆喰の表現をつくり出している。

15年かけてつくりあげた漆喰の新たな世界

漆喰にワラや小石を入れる、手を使って模様つけるなど自由自在、表情豊かに漆喰塗りを仕上げる植田さん。この道35年の左官のプロは「この仕上げの手法はよそにはないねん。」と話す。この技術は植田さんが仲間と共に試行錯誤しながら、15年以上かけてつくりあげたもの。石こうボード下地に漆喰を塗るといっても難しいことだった。アルカリ性の漆喰が石こうボード表面ついている紙を傷めると同時に酸性である内部の石こうそのものを溶かしてしまう可能性もあるためだ。

「自信が持てなかった頃はひと部屋しかできなかったけど、今はどんな大きな壁でも大丈夫。」また植田さんはこの技術を惜しみなく指導しにも行かれています。「左官屋さんに儲けてもらわないとあかんから。」

息の合う仲間。活気溢れる現場

「左官の仕事はおもしろい。」と話す植田さん。その気持ちとほがらかな人柄が仲間を呼び寄せるのだろう。左官の現場は鏝を動かす音、材料を練る音など様々な音が響く。その中で時に厳しい声が飛び、時に笑い声が湧いていた。

左官職人だけでなく、工務店の親方の一面を持つ

植田さんは左官職人であり工務店「総合建築 植田」(兵庫県淡路島)の親方でもある。左官職人としてだけでなく、家の基礎や屋根葺きなど何でもこなす。同じ左官担当の青山さんは「他の分野でも、やるからには並以上の仕事をしたい。」と話す。淡路島にてサポート建築システムの工務店としてPAC住宅の施工もして頂いた。(p.11にインタビュー掲載)

—総合建築 植田の左官担当の皆さん—



青山 幸夫さん

左官の仕事は大工の仕事を生かすことも、殺してしまうこともある。



池上 平八郎さん

青山さんと池上さん。植田さんと合わせて総合建築 植田の左官担当トップ3。「左官が一番表面にあられる仕事。大工の仕事を生かすことも、殺してしまうこともある。」(青山さん談)



東谷 信明さん(左)と荒井 平さん(右)



千田 渉さん

左官界のポープたち。様々な仕事をこなす。植田さんの孫弟子という千田さんは、今回の作業のために鎌倉から足を運んだ。



うえた としひこさん。兵庫県の淡路島出身。15歳で左官の道に入る。25歳の時、慢性肝炎を患い数年間仕事が出来なくなったのを機に、工務店を始める。仕事を愛する左官職人・工務店の親方は「仕事始めたら、(病気が)治ってしもた」

左官の現場を追う

手間がかかるといわれる塗り壁。その実際は？

室内の壁を仕上げる植田さんの仕事をPACの現場で追った。現場は壁、天井を漆喰で仕上げる。下地は木摺りと石こうボードの2種。下地によって異なる左官の作業工程。

まず左官の下準備

①養生

下地の種類にかかわらず、現場に入って、いの一番にする作業。作業中に漆喰を付けてはいけない所すべてに養生用のテープやビニールを使い、しっかり覆う。地味だが大切な作業。



下地の種類にかかわらず行う。



漆喰が木部に付くと、付いたところからアクが出て変色してしまう。タイルなどに付いても、後から落とすことができない。養生あなごるべからず。

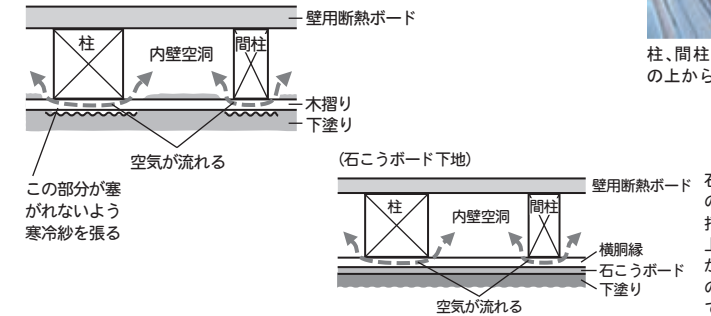
下地：木摺りの場合



柱、間柱の上に杉板をすき間(目透かし)をとり打ち付ける。最後には隠れてしまうのがもったいないようだ。

空気の流れを確保する ②寒冷紗を貼る

PACだからこそ必要になる作業。柱、間柱の上に打たれた木摺りの棧。柱と柱(間柱)の間の空気は、棧のすき間によってつながる。上から塗る左官材料ですき間がつかないように、柱、間柱部分に寒冷紗(メッシュ状の布)を張る。



柱、間柱の部分は、木摺りの上から寒冷紗を張る。

下地：石こうボードの場合



石こうボードは内装の下地として現在一般的に使用されている。PAC住宅の場合は調湿性能の高いタイガースカトボード(株吉野石膏)を使用。

ひび割れを防ぐ

②目地処理

木造の建物は構造材の木が建ててからも動く。その動きが天井や壁に伝わり、ひび割れにつながりやすい。石こうボードの継ぎ目はひびが出やすい箇所。そのためジョイント保護材にボンドを混ぜたもので継ぎ目を埋める。

上から塗る漆喰は、石こうボードと継ぎ目を埋めた部分とで収縮率が異なる。それがまたひびを引き起こすことにもなるため、継ぎ目を埋めた上からさらに寒冷紗を張り、ひび割れを防ぐ。



ジャリ、ジャリッ。ひび割れを防ぐため、ジョイント保護材にボンドを混ぜた材料で石こうボードの継ぎ目を埋めていく。壁、天井、階段吹抜…すべてのボード目地が埋められていく。



さらに埋めた継ぎ目の上に寒冷紗を張る。この作業をするのとしないのでは、かなり差が出るという。

下地：木摺りの場合

藁や砂を混ぜて

③下塗り

漆喰に、藁、砂などを混ぜた材料を塗る。



鏝に材料をのせ、下から上へ下地に引掛けるように塗られて行く。力が必要のように思えるが植田さんたちの鏝はなめらかに動く。淡々と作業が進められる。

裏側から見る。棧のすき間に下塗りがくい込んでいる。これが乾くと、しっかり下地とかがみ合い、頑丈な壁になる。



仕上がりラインが決まる

④中塗り(2回)

下塗りが十分乾いてから、さらに塗り厚を確保するため、中塗りを行う。



剥がれ等を防ぐため、材料は上塗りに行くほど、糊などの結合材料の割合を少なくする。

2回目の中塗りで壁のラインが決まる。水平、垂直のラインを正確にするため、定規や墨付けなども使いながら調整を行う。



空間のポイントなる壁の角は失敗が許されない。物など当たり欠けやすい箇所でもあるため寒冷紗を入れ補強する。

やっときました

⑤仕上げ

「これから仕上げに入ります。」と話す植田さんの言葉、現場にはしる緊張感。柔らかい白色と質感がもたらす温かさと重厚感のある空間があらわれた。



3人が仕上げの漆喰を塗り、植田さん手を使って模様を付けているところ。鏝は素早く動き、材料の水引きが始まらないうちに模様をつける。スピードだけでなく4人の息を合わせてこそできる作業。



仕上りのパターン

下地：石こうボードの場合

漆喰と石こうボードの化学反応を防ぐ

③シーラー処理

下塗りの漆喰の前にシーラー(下地処理材)を塗る。なぜ塗るのかを植田さんに教えて頂いた。「漆喰はアルカリ性。石こうボードは酸性。石こうボードに直接、漆喰を塗ってしまうと、酸性



下塗りの前にシーラーを塗る。

のボードがアルカリに侵される。それを遮断するために薄い膜をつくらないとボードを傷めてしまう。」シーラー処理は水引きを一定にするという大切な役目も果たすという。

※水引き…材料を塗り重ねる際、上層の材料の水分が下層の材料に吸われること。水引きの調整は仕上がりに大きく関係する。

仕上げの前に

④下塗り

シーラー処理の後、亀裂を防ぐために漆喰に下塗り用の砂を混ぜた砂漆喰を塗る。



シャ、シャツ。ようやく下塗り作業が始まった。下塗りの砂漆喰とはいえ塗られた壁は石こうボードのグレーから、おだやかな白色に変わり現場の雰囲気はずいぶん“家”らしくなった。

仕上げの前に

これまでの作業の中でもされていた掃除は仕上げ前、養生をはがす時には念入りに行われていた。これまでの作業で床の養生板の上に落ちた材料もヘラなどを使って落とす。「左官は現場をきれいにしとかんと、絶対ええ仕事ができへんのだ。」と荒井さん。



養生をはがされ、掃除が始まると最後の仕上げに入る合図が出されたように現場の空気張り詰め出した。

鏝を動かす以外にもある左官の仕事

材料づくり

その土地にある土や藁スサなどを集め、気候や天気の様子をみながらその場でつくるといのが昔ながらの材料づくりの姿なのだろう。しかし現在は材料メーカー製の原料に骨材、接着剤まで調合されたものを使うことが多い。植田さんが使っているのは「城かべ」(近畿壁材工業)。「今は調合した材料が色々あるので、その中で自分が選んだこだわりの城かべです。」これに各施工段階に合わせ砂、藁、小石などを配合し、水を加えて練る。



「20kg」と書かれている袋を持ち上げ、大きな樽の中に、漆喰に水や砂が入ったこれだけの材料を混ぜるには電動のミキサーが出番。出来上がった材料は塗り始めるとアツという間になくなった。鏝を持っている手を遊ばせないよう、材料作りは繰り返された。



植田さんのところでは、長さなどを考え、ワラの材料を特別に作ってもらっているという。写真奥は砂を篩っている様子。漆喰に混ぜるために材料の中に混じっている小石などを取り除く。



磯の香り漂う

ふのりを炊く

漆喰の材料のひとつ、ふのり。今回ふのりを作る様子を見ることができた。

出来上がったふのりはシーラーとして石こうボードの上に塗られた。

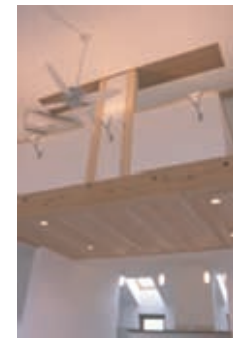


ふのりの原料は海藻。実物を見て一目瞭然。



海藻に水を加えたものを電熱機で加熱。それを裏ごして、ふのりの完成。

石こうボード下地



木摺り下地



最終的に木摺り下地で12~15mm、石こうボード下地で6~8mmの漆喰が塗られた。完成すると下地の違いはわからないだろう。

無垢の木と漆喰の家に暮らす

7ページで紹介した植田さんの施工にてPACサポート建築で家づくりをされたAさんのお住まいは壁や天井に左官の腕が十分に発揮された、まさに無垢の木と漆喰の家。淡路島のAさんのお住まいにて奥様とお母様、そして植田さんにもお越し頂き、お話を伺いました。

編：落ち着く空間ですね。塗り壁で仕上げるというのは最初から希望していたのですか。

Aさん(以下A)：最初は全くなかったんです。体に害のない材料でという希望はあったんですけども。工務店の親方の植田さんがたまたま左官のプロだったと。

編：植田さんが漆喰を選ばれた理由は何かありますか。左官材料は他にも色々ありますが。

植田さん(以下植田)：単に得意分野というのと、予算で出来る範囲というのと。うちは基礎から屋根から全部自分のところですから、やりくりして余ったお金を全部漆喰につぎ込んだ(笑)。

コストのこと

編：漆喰を採り入れるのに、コストについてはどうだったのでしょうか。

A：一番最初に植田さんに話を聞いた時に、45坪くらいの家で全部塗っても100万円プラスくらいの予算で出来るかなって言われて。そんなに手の届かない金額じゃないんだというイメージがありました。キッチンなどは豪華なものじゃなくてもいいと最初から思っていたので、そのあたりをシンプルにしたら漆喰の分はどうかかなと思いました。

編：漆喰は高いという先入観があるのですが。

植田：意外にそうでもないんだけどな。高いって言うても、建築費の1割にも満たないからな。クロス

は単価2千円くらい出したらそれなりがあるけど、左官仕上げでは昔は7千円、8千円、1万円なんぼは当たり前やった。それで左官屋がクロス屋に負けてしまった。

A：高かったでしょ、とみんなから言われます。

植田：わしらも他から「なんでできるの？」って言われる。基礎からやってるからできると言ってる。

A：そしたら、他の工務店さんをお願いして、漆喰塗りたいって言ったらべらぼうに高くなる？

植田：そうやろな。でも手の届く範囲やと思う。やりくりすれば…。

ボンドのこと、シーラーのこと

A：我が家の家づくりは子どもの健康がOKな状態にするのが一番というのがあって。

編：上のお子さんが化学物質過敏症とお聞きしました。使う材料にはかなり気を配ったと思いますが。

植田：過敏症の方にはここまではできる、できないをゴっつう勉強させてもらた。かなり難しい。ボンドなどは奥さんに全部渡して、電子レンジでチンしてもらって。その匂いをお子さんが「これだったら辛抱できる」ということで使わせてもらった。

編：ボンドは使っていない訳ではなく、OKだったものを使わせてもらっているんですね。

植田：石こうボードにつける材料は水引きを調整するためにつなぎ材にどうしてもボンドが必要。上塗りにはボンドは全然入っていないから、下塗りがある程度乾いて、匂いがなくなったら、上塗りをかける。その厚みも6mmあるから乾いたら匂いは出ないと思う。だけど湿気の多い家だったり、温度が30℃を超えると(下塗りのボンドの)匂いは出てくるかもしれない。PACの家は風通しを考えているから

温度、湿気の心配がない。だから匂いは出てこない。A：ひと括りで過敏症といっても、すごく症状にばらつきがあって。ここまで大丈夫というのは人によっても違うし、同じ人でもその時の体調によっても違う。ちょっと疲れが続くと、大丈夫だったものもダメになったり。材料を選ぶ時は人体実験しながらでした。

植田：漆喰の中でも化学物質ではないつなぎ材に海藻糊がある。それが乾き始める時に匂いが出る。塗った時にお子さんがここに来て中に入ってくれなかった。匂いであかんて。

A：あれはふのりの匂い？

植田：そう、ふのり。1週間くらいしたら堂々と入って来てくれた。

編：シーラーについてはどうでしたか？残念ながら化学物質が含まれていないものはないと聞きます。

植田：ここではヤヨイ化学のコアシーラーを使った

編：それは息子さんにもチェックしてもらって？

A：はい、ヤヨイ化学にも安全データシートを送ってもらいました。

植田：その時点では水性のシーラーがあるのはそこしかなかった。

A：ところで漆喰そのものには普通、有害物質も入ってる？

植田：漆喰自体には入っていない。作るメーカーによったら、化学糊が入っているのが結構ある。

編：その方が作業がしやすいからでしょうか？

植田：いやいやコストの問題。ふのりより化学糊の方が安い。化学糊を漆喰にたくさん入れたら、材料自体が使いにくくなったりする。私は天然のふのり粉末を使っているのだから自然のものにより近い、色々ある中で一番信頼でき、使いやすいということで、ここ(近畿壁材工業)のをを使うんやけど。



お子さんの部屋。漆喰仕上げの壁、天井。腰壁と建具は杉、床は桧の無垢板。部屋を通る風もさわやか。



壁、天井の漆喰仕上げの中に、キッチンのトップライトの明るさが映えていた。

A：漆喰＝すべて自然素材というわけではない。それは珪藻土などでも一緒ですよ。安全な素材で漆喰にしたい時は腕のある人に頼まないと難しい？

植田：材料のことを良く知り、勉強している左官さんだったらできると思う。

つい触りたくなる

植田：吸湿性を考えたら土壁で厚さ10cm以上塗ったら最高。

自然のものやし、断熱効果はあるし。漆喰もクロスよりは

いい。ここは漆喰を6mm塗って、湿気を吸って、吐いてもくれる。より良いと言ったら少なくとも漆喰を3cm以上は塗ってもらわんと。ただここでもクロスの数10倍の(吸放湿)効果はあると思う。

A：結露が全然なかった。どこの部屋からも、一滴もなし。漆喰は見た感じもあたたかいし。

植田：クロスばかりの所にいて、ここに来たらわかる、質感の違いが。

A：見に来た人が居心地ええなあって。子どもの友達が来たら、「ひろ～、ええな～」って。その家はうちより広いんだけど。気持ちが落ち着くのかな。それと、(見に来た方が)触る。

植田：必ず触る。子どもだけでなくお母さん方も触っている。

A(お母様)：(リビングの藁の入った仕上げをさし)ちよいちよい藁が出ててええなあ。ツルツルより自然らしくて。

編：家づくりの時に選択肢のひとつになりますね。

A：絶対おすすめやけどね。



リビング天井。間接照明の陰影で引き立つ模様。



Aさん奥様(右)とお母様(左)